

# 埼臨技だより



発行所 公益社団法人 埼玉県臨床検査技師会 〒330-0072 さいたま市浦和区領家7-14-7  
TEL 048(824)4077 FAX 048(824)4095 URL:<http://www.sairingi.com/>  
携帯URL:<http://www.sairingi.com/keitai/index.html> X(旧Twitter): @sairingi

## 第53回 埼玉県医学検査学会のお知らせ

開催日：2025(令和7)年12月7日(日)

開催場所：ソニックシティ

テーマ：ホップステップジャンプ

サブテーマ：～飛躍する未来に向けて、今学ぼう～



～飛躍する未来に向けて、今学ぼう～

### 【会計部より】

第53回埼玉県医学検査学会の会計部長を務めさせていただきます、越谷市立病院の田立さやかと申します。初めての実行委員として、このような大任を賜り、重責を感じる部分もありますが、第52回石井会計部長のご指導やご助言を賜りながら、学会の成功に向けて精一杯努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。

第52回学会に引き続き「Peatix」アプリを使用して学会参加登録や事前決済を行いますので、アカウントの削除やアプリのアンインストールはおこなわないようお願い申し上げます。また、埼臨技HPの第53回学会バナーよりアクセスしていただくことで学会情報をご覧いただけます。随時更新してまいりますので、ぜひご確認ください。

私たち学会実行委員会は、臨床検査の未来を皆様と共に考え、意見を交わす場としての学会を目指しております。心より皆様のご参加をお待ち申し上げます。

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 会計部長 田立さやか)

### 【The First Take ～学会を経験して～】

第53回埼玉県医学検査学会・実行委員学術部を務めます、済生会加須病院の菊池航介と申します。2025年も半年が経過し、いよいよ最も暑い季節がやってきました。年々暑さに耐えるのが辛くなり、屋内で過ごす時間が増えています。皆様はどのようにお過ごしでしょうか。

私が初めて学会発表を経験したのは3年前のことです。学会発表のための抄録やスライド作成は非常に大変でした。特に、丁寧な言葉遣いで内容を簡潔にまとめることが難しく、毎回上司にご確認いただくたびに頭を悩ませていました。初見の方にも伝わる言い回しや分かりやすい要約を工夫するのに時間がかかり、抄録の完成には2ヶ月、スライドにはさらに2ヶ月を費やしました。

本番ではPowerPointに記載した原稿が画面に収まらず、文章が途中で切れてしまい、慌てた経験から、原稿は印刷したものを使用するのが良いかと思えます。また、緊張のあまり昼食が喉を通らない経験もしましたが、伝えたい内容が一部抜けていたと後で上司から指摘されました。本番は一度きりですので、原稿を繰り返し読むだけでなく、事前に多くの人の前で話す練習をおこなうこと

が必要だと感じました。

学会発表を通じて文章能力が向上し、日々行っている検査への理解が深まりました。また、多くの方々に支えられていることを再認識する貴重な時間ともなり、大変価値のある経験でした。学会発表は自身の成長に大いに役立つものだと感じております。ぜひ皆様もこの機会に挑戦してみたいかがでしょうか。心よりお待ちしております。

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 学術部 菊池航介)



## 令和7年度 公益社団法人埼玉県臨床検査技師会 定時会員総会が開催される

令和7年度公益社団法人埼玉県臨床検査技師会定時会員総会が令和7年6月13日(金)にRaiBoC Hall (市民会館おおみや)7F小ホールにて開催された。本総会の審議内容は令和6年度事業報告、収支決算報告、監査報告、第62回日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会学会長選任および令和7・8年度監事の選任についてであった。

総会は濱本隆明事務局長の進行により行われた。はじめに松岡優会長の挨拶が行なわれ、参加された会員の皆様の日頃のご協力に感謝の意を表された。続いて名誉会員の原繁一氏、津田聡一郎氏の紹介があった。

総会に先立ち各賞表彰式が行われ、令和7年度埼臨技特別功労者賞は神山清志氏(埼臨技前会長)に、令和7年度埼臨技功労者賞は木暮憲幸氏(第52回埼玉県医学検査学会学会長)に授与された。令和6年度埼臨技会誌優秀論文賞は倉股春希氏(深谷赤十字病院)に授与された。永年会員表彰は66名が該当し、総会では、4名が表彰された。

総会は議案審議に先立ち矢作強志氏(川口市立医療センター)が議長に任命され、矢作議長より総会役員が指名された。資格審査委員長に佐瀬勝也氏(東松山医師会病院)、資格審査委員には東部地区から久保田亮氏(埼玉県立大学)、南部地区から神嶋敏子氏(埼玉県立小児医療センター)、西部地区から伊藤隆史氏(医療法人明晴会西武入間病院)、北部地区から原誠則氏(壮行会行田総合病院)が任命された。また書記には田口莉央氏(越谷市立病院)、赤岩千優氏(さいたま市立病院)が、議事録署名人には、野本伊織氏(埼玉県済生会川口総合病院)、鶴岡慎悟氏(JCHO埼玉メディカルセンター)が任命された。審議前に矢作議長は、「本日18時30分現在の出席者数は69名、委任状出席者数1,973名、議決権行使書数459名で、合計2,501名となる。この数は第一号から第二号議案を審議するための必要者数である6月1日現在の全会員数3,694名の過半数を超えており、定款第18条の規定により本総会が成立する。」と宣言された。(議会の出席者確定人数は86名で合計2,059名)

議事審議は佐瀬議事運営委員長より議事日程が提案され、それに従い矢作議長の進行により開始された。定時会員総会の第一号議案である令和6年度事業報告について松岡会長、猪浦一人副会長、山口純也副会長の3名より、第二号議案である令和6年度収支決算報告について神戸考裕会計部長、監査報告を遠藤敏彦監事よりそれぞれ説明があり、各議案とも質疑応答はなく、議決権行使書および出席者の賛成が過半数を超えたことから第一号議案、第二号議案は、原案通り承認された。第三号議案である第62回日臨技関甲信地区・首都圏支部医学検査学会学会長選任は、猪浦副会長より松岡優氏(埼玉医科大学病院)を推薦する旨の提案があり、議決権行使書および総会の出席者の賛成が過半数を超えたことから第三号議案についても原案通り承認された。続いて第四号議案である令和7・8年度監事の選任について松岡会長より島村益広氏(関東甲信越ブロック血液センター埼玉製造所)、細谷博光氏(細谷会計事務所)を推薦する旨の提案があり、新任監事2名が異議なく承認

され、すべての議案が可決された。

総会終了後、瀧沢義教氏（53回埼玉医学検査学会学会長）よりお知らせがあり、また、本総会をもって監事を退任される遠藤氏より挨拶が行われ、全ての日程が終了となった。

総会は、矢作議長の円滑な議事進行と出席していただいた会員の皆様、委任状によるご協力により滞りなく開催ができた。矢作議長、総会役員ならびに会員の皆様にこの場をお借りし厚くお礼申し上げます。

（文責：網野育雄）



埼臨技特別功労者賞



埼臨技功労者賞



永年会員表彰（総会参加者）



埼臨技会誌優秀論文賞



## 研究班研修会報告

### テーマ 令和6年度埼玉県・埼玉県医師会臨床検査精度管理事業報告（血清）と小児甲状腺疾患について

主催 血清検査研究班

実施日時：2025年4月18日 18時30分～20時00分

会場：Web開催 教科・点数：基礎教科－20点

講演 1：令和6年度埼玉県・埼玉県医師会臨床検査精度管理事業報告（血清）

講師 1：岡倉 勇太（株式会社 TLC戸田中央臨床検査研究所）

講演 2：小児甲状腺疾患について

講師 2：川崎 芳正（シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社）

参加人数：会員32名 賛助会員2名

出席した研究班班員：渡邊剛 山本晃司 岡倉勇太 飯山恵 森圭介 吉田萌香 深田愛

研修内容の概要・感想など

今回の研修会は2演題で構成され、まずは岡倉氏から令和6年度埼玉県・埼玉県医師会臨床検査精度管理事業の報告があった。

調査報告は昨年同様の項目に加え、今年度からCA19-9を評価対象項目とした。また、参考調査としてフェリチン、CA125、CA15-3を行った。フェリチンは方法および機器・試薬間差を認め、CVについては試料22に比べ試料21が大きい試薬を複数認めた。CA125は試薬間CV、試薬内CVとも昨年度および日本医師会とばらつきは同程度であった。また、CA15-3も試薬間、試薬内CVともよく収束していた。測定法の誤りや報告値の未入力認められたため、参考調査であっても正確な入力をお願いしたいとのことだった。

その他、例年行われている調査項目については全体的に良好な結果であったが、CA19-9は昨年と同様に試薬間差が認められた。回答については、測定法・単位の誤入力および結果の未回答が多く認められた。また今年度から基準範囲の集計を行ったが、免疫グロブリン以外でJCCLS共用基準範囲の選択があり、数施設で測定範囲の入力があった。測定法や単位など誤入力がないよう自施設の測定法や試薬添付文書を確認し理解したうえで結果報告のチェック体制を整えていただきたいとのことだった。

川崎氏からは甲状腺の基礎から検査データの見方・小児甲状腺疾患についてと幅広い講演内容であった。

甲状腺は喉仏の下にある蝶のような形をした臓器で、代謝の調節に必要な甲状腺ホルモンを分泌する。甲状腺ホルモンは発育、成長に必須であり、FT4値は成人と比較し月齢1カ月が最も高く1歳頃から成人と同程度まで低下する。TSHは甲状腺を刺激する作用を持ち、生まれた日が最も高く4～5日で低下する。

甲状腺の病気は3つに分類でき甲状腺機能亢進症（病名：バセドウ病等）、甲状腺機能低下症（病名：橋本病等）、甲状腺の腫瘍（腺腫様甲状腺腫）がある。70～80%が橋本病とバセドウ病である。バセドウ病の主な症状は、疲れやすい・手が震える・体重減少などがあり、橋本病の主な症状は、無気力・脱毛・認知症状がある。これら甲状腺疾患の発症の4大きっかけは、過労・ストレス・喫煙・妊娠出産であり、女性は男性の数倍～数十倍の頻度で発症する。

甲状腺疾患の診断手順は臨床所見や症状、採血結果から疑われる甲状腺異常を推測し、超音波検査や機能検査、自己抗体検査を行い診断する。主な治療は薬や手術・放射線があり、治療過程によるFT3、FT4、TSHの値の変動に注意が必要である。

新生児マススクリーニングとして行う甲状腺機能検査は、先天性代謝異常症の早期発見・治療、知育発育障害に陥るのを防ぐことが目的である。新生児マススクリーニングは、原則として日齢4～6日、哺乳後2時間前後の沐浴後に採血することが正しい結果を出すのに重要である。

今回の研修会は精度管理調査報告、甲状腺についてなど多岐にわたる内容であった。検査データの見方や治療による検査結果の推移など学んだことを自施設でも活用していきたい。

（文責：吉田萌香）

## テーマ 忘れていませんか？ 尿検査のお約束！

主催 一般検査研究班

実施日時：2025年5月16日 19時00分～20時30分

会場：RaiBoC Hall市民会館 おおみや集会所1 教科・点数：基礎教科－20点

講演1：尿検体・尿試験紙の扱い方

講師1：池上 孝徳（シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社

POC事業本部 POC事業部 プライマリケアグループ 学術担当）

講演2：尿検査のピットフォール

講師2 織田 喜子（国立がん研究センター東病院）

参加人数：会員47名 賛助会員4名

出席した研究班班員：藤村和夫 渡邊裕樹 柿沼智史 織田喜子 小針奈穂美 松本実華  
林達矢 福島明音

研修内容の概要・感想など

今年度最初の一般検査研究班主催の研修会を開催した。

講演1では、尿検体・尿試験紙の扱い方についての内容を中心に講演がされた。尿試験紙は湿度の影響を受ける。しかし、湿度がどの程度で、どの検査項目に、どの程度影響を及ぼすのか説明している文献は存在しない。今回の講演では、湿度が25%を超えている環境で、乾燥剤が無い状態で尿試験紙を保存した場合にGLUの項目に1+程度の偽陽性が最も早く出現することだった。当然、高湿度環境に長時間放置している場合は、他の項目も偽陽性の影響がある。検査施行時に必ず、尿試験紙の色調を確認してから検査を行うことが重要であり、乾燥剤の使いまわしはNGであるとのことだ。

講演2では、尿試験紙のおもなピットフォールと尿沈渣のピットフォールの2本柱での講演であった。

尿試験紙のピットフォールとして重要なのは、偽陽性反応・偽陰性反応についてであった。講演1で尿試験紙の原理や扱い方を学んでからの偽反応についての説明であったため、とても

分かりやすかった。尿沈渣におけるピットフォールは赤血球と脂肪球・シュウ酸カルシウム結晶・真菌の間違いやすい沈渣成分の鑑別、白血球とトリコモナス原虫・尿細管上皮細胞の鑑別があげられた。短い時間での説明であったが、6月・7月の研修会でもこのピットフォールの内容にも触れるため、是非多くの方に受講していただきたい。

一般検査における尿定性検査・尿沈渣検査は現在多くの施設で実施されている検査である。簡便に行われるこれらの検査であるが、試験紙の取扱いや、尿検体の取扱い方により検査結果に影響を及ぼす。また、近年、新薬の開発が進み、尿定性結果に影響を及ぼす薬剤も増えてきている。今回の研修会で改めて、その重要性を再認識できた。

(文責：藤村和夫)

## テーマ **安全な輸血検査を行うために、正しい手技・知識を学ぼう**

主催 輸血検査研究班

実施日時：2025年5月16日 19時00分～20時30分

会 場：浦和コミュニティセンター 第14集会室 教科・点数：基礎教科－20点

講 演 1：令和6年度埼玉県・埼玉県医師会精度管理事業報告

講 師 1：渡邊 一儀（獨協医科大学埼玉医療センター）

講 演 2：新人および異動者への輸血教育方法について

～ 輸血のための検査マニュアルVer. 1. 4の変更点について ～

講 師 2：志村 祥太（川口市立医療センター）

参加人数：会員26名

出席した研究班班員：宮澤翔子 岸健太 廣田渉 佐々木翔太 大垣秀友 志村祥太

研修内容の概要・感想など

今回は、令和7年度第1回目の輸血検査研究班研修会であった。「安全な輸血検査を行うために、正しい手技・知識を学ぼう」をテーマに、精度管理事業報告および輸血教育に関する2つの講演が行われた。

最初に、渡邊氏より令和6年度埼玉県・埼玉県医師会臨床検査精度管理事業報告があった。参加施設数、試料内容、検査方法、各試料の結果および評価について、近年の推移も交えて解説された。今回のD評価の施設に関して、誤判定はRhD項目の1施設のみであった。その他のD評価は参加申し込みがあったものの回答未記入によるものであった。輸血検査は、誤りが輸血過誤による重篤な事故につながる可能性がある。当然、理想はA評価100%であるが、最低限の目標としてD評価0%を目指す必要がある。講演の最後には、ガイドラインの紹介や精度管理の基本的な考え方についての説明があり、輸血管理に携わるうえで参考となる内容であった。

志村氏の講演では「輸血のための検査マニュアルVer. 1. 4」の内容について幅広く説明があった。このマニュアルは安全な輸血に最小限必要な知識と技術についてまとめられている。今回の改訂内容も交えて、輸血前の確認事項、基本的な検査手技、各検査（血液型検査、不規則抗体検査、交差適合試験）の方法や検査結果の解釈に加えて、志村氏の施設で行う教育体制の紹介もされた。

マニュアルやガイドラインを理解し、正確な手技と知識を習得することは、安全な輸血療法の実現に不可欠である。本講演が、今後の各施設における教育体制や輸血管理体制の構築に役立つこと期待したい。

(文責：岸健太)

## テーマ **腫瘍マーカーについて**

主催 血清検査研究班

実施日時：2025年5月22日 19時00分～20時00分

会 場：Web開催 教科・点数：基礎教科－20点

講 演：卵巣明細胞がん新規マーカーTFPI 2 について

講師：浅越 綾（東ソー株式会社）

参加人数：会員70名 賛助会員2名

出席した研究班班員：渡邊剛 山本晃司 岡倉勇太 飯山恵 森圭介 吉田萌香 深田愛

研修内容の概要・感想など

今回の講演は卵巣明細胞がん新規マーカーTFPI2について、卵巣がんの疫学から現在使用されている卵巣がん腫瘍マーカーとの比較、またTFPI2の実用性についてなど、幅広い内容の講演であった。

卵巣がんは年々罹患数が増加しているがんであり、後発年齢は40～60代と現役世代に好発する。卵巣がんの組織型により、漿液性癌、類内膜癌、明細胞癌、粘液性癌に区分され、明細胞癌は頻度として日本人の25%にあたる。明細胞癌は抗がん剤感受性が低く、早期に発見・治療することが望まれる。

卵巣明細胞がんの検索に使用する腫瘍マーカーには、日常的に使用されているCA125の他、CEA、CA19-9、HE4などがあり、CA125を基本として各腫瘍マーカーを組み合わせると陽性率が向上するが、これらの腫瘍マーカーでは良性・悪性の鑑別や組織型の鑑別に苦慮する。今回紹介のあったTFPI2はセクリトーム解析により同定された糖タンパク質であり、明細胞癌に対して陽性率の高い腫瘍マーカーである。臨床研究では、TFPI2は他の腫瘍マーカーと比較して、卵巣がんマーカーの組み合わせにTFPI2を入れることで悪性腫瘍検出性能が高いこと、また良性悪性の判別能もCA125と比較して特異度が高いことなどが挙げられた。また、TFPI2とCA125は相関性を認めないことから、これらを組み合わせると検査することで卵巣がんの組織型・病期などを推測することができ、TFPI2はCA125と補完関係であると考えられる。TFPI2の検査上の特徴として、検体安定性の影響で測定を迅速に行うべきであること、またTFPI2は胎盤に大量に発現しているため生理周期や妊娠により偽陽性を示すことがあるため注意が必要である。

TFPI2は2021年4月より新測定項目として保険適応されているが、臨床現場での浸透率は高くない印象を受ける。今回の研修会で説明のあったTFPI2はもちろん、他の新規腫瘍マーカーの知見を得ることは、検体検査を行う立場として重要であると考えられる。

（文責：渡邊剛）

## テーマ 顕微鏡操作・マクロ写真撮影技術の向上

主催 病理検査研究班

実施日時：2025年5月23日 19時00分～21時00分

会場：浦和コミュニティーセンター 第13会議室 教科・点数：専門教科－20点

講師：谷垣 範純（株式会社ニコンソリューションズ）

三鍋 慎也（防衛医科大学校病院）

参加人数：会員43名 その他2名

出席した研究班班員：三鍋慎也 細沼佑介 小島朋子 松本祐弥 遠山人成 三瓶祐也 渋谷樹  
石川勇貴 佐藤達也

研修内容の概要・感想など

今回の研修会は、顕微鏡の基礎知識やマクロ写真撮影で使用するカメラの仕様・撮影方法などをテーマに開催した。

谷垣氏は、Nikonの生物顕微鏡の基本的な調整方法と清掃方法について講演を行った。観察前の調整法として鏡筒部、ステージハンドル、焦準装置の調整について解説した。アイポイントは接眼レンズ目当てから17mm離れたところで調節し、眼幅は視野が一つに融合する真円になるように鏡筒を双眼鏡のように折り曲げて調節する。視度補正は調整前に必ず標準位置に合わせてから、低倍と高倍の対物レンズを交互に切り替えて調節すること。ステージハンドルはX軸とY軸のハンドルに少し隙間をあけることでハンドル使用時に斜めに移動する現象が改善されると解説した。再焦準リングはステージを上下に動かす際のスライド割れ防止ができる機構

であった。観察中の調整法として視野絞り、開口絞り、対物レンズの調整について解説した。視野絞りはピントを合わせた後、視野絞り像を中心に移動させ、接眼レンズ視野環に外接するように視野を広げることで調整できるとのこと。開口絞りは対物レンズの性能を引き出す重要な役割があり、各対物レンズの開口数の70～80%にすると適正な観察ができると、実際の標本の顕微鏡写真を例に解説した。対物レンズについて、40倍の対物レンズではカバーガラスの有無やその厚さによって見え方が変化するため、それぞれの標本に適した対物レンズを使用することが重要とのこと。補正環付きの対物レンズを使用する場合は、顕微鏡で指定されているカバーガラスの厚さ0.17mmを基準とするため、補正環の目盛りを0.17に合わせ標本にピントを合わせたところから調節するとよいとのこと。清掃方法としてレンズの拭き方、ごみの箇所の見つけ方について解説した。レンズを拭く際は中心から外に向かって渦巻き状にペーパーの拭く部分を変えながら拭き上げ、レンズから離さず拭き上げるのがポイントとのこと。最後にハロゲンランプとLEDランプの光源の色の違いについて解説した。

三鍋氏はマクロ写真の撮影に関して、カメラの仕様や適した設定について検証を交えて解説した。カメラの基礎知識として、カメラの種類や構造を提示し、イメージセンサーの大きさによる長所や短所、レンズの特徴を説明した。レンズと焦点距離、画角、センサーサイズがそれぞれ関係していることがわかった。続いて、露出について、絞りやシャッタースピード、ISO感度の関係性を説明した。絞りはF値という値で表されており、光量や被写界深度の調整を担っている。F値が大きいと絞りが閉じた状態に近づくため、光量が少なくなり、被写界深度は深くなる。F値が小さい場合はその逆である。F値と焦点距離の検証ではピントのボケ感に違いがあることがわかった。シャッタースピードは光量と、動く被写体のブレの調整を担っている。シャッタースピードが長いと光量が大きくなり、被写体のブレは大きくなる。マクロ写真の撮影に関しては被写体が動かないため、光量の調整を主に考える必要がある。ISO感度は入力された電気信号の増幅を調整する値であるが、ISO感度を上げすぎると目的の信号のみならず、ノイズまで増幅させてしまうため注意が必要である。マクロ写真の撮り方については、背景色や構図、ライティングの説明が行われた。背景色は検体のコントラストを左右するため、青色か緑色が無難であろうとのこと。目的に応じて、白色や黒色の背景を選択する施設もみられた。構図は基本的に日の丸構図が良いとされ、被写体/背景の面積比は2.0～3.0以上が推奨であった。ライティングは45度が基本であるが、陰影を利用した立体的な写真を撮影する際は角度を変更するとよいとのこと。また、F値を大きくすると被写界深度が深くなりピントの幅が大きくなるが、同時に解像度が落ちてしまうため注意が必要である。撮影モードに関してはマニュアルモードがおすすめとのこと。マニュアルモードのメリットは撮影台の光源に対する適正露出を導くことができ、F値の指定によるピントの調整が可能ということである。また、撮影時には撮影台や検体の水分や血液を拭き光の反射を防ぐことや、歪曲収差の起こらない画角で撮影することなどにも注意する必要があるとのこと。

本研修会では、顕微鏡やカメラといった光学系の機材について、適切な使用方法を学ぶことができた。機材の仕組み、設定値の関係性を知ること、より詳細な観察や撮影を日々の業務で生かしていきたいと感じた。

(文責：石川勇貴、佐藤達也)

## テーマ 初心者必見！ 遭遇する前に備えよう ～パニック値とインシデント～

主催 臨床化学検査研究班

実施日時：2025年5月23日 19時00分～20時30分

会場：ソニックシティビル 601会議室 教科・点数：専門教科－20点

講演 1：知っておこう！パニック値の対応

講師 1：河野邊 和弘（東松山医師会病院）

講演 2：知って防ごうインシデント事例 ～集先輩たちから学ぶ体験記～

講師 2：杉村 楓（越谷市立病院）

参加人数：会員37名 入会申請中6名 賛助会員1名

出席した研究班班員：北川裕太郎 杉村楓 廣瀬良磨 永井謙一 福島渉 稲葉拓郎  
田中満里奈 河野邊和弘 関根梢恵

#### 研修内容の概要・感想など

今回の研修会は主題に掲げた通り、初心者にとって嫌厭されがちな「パニック値」と「インシデント」について、実際に遭遇した際に焦らないための備えになればという思いで企画された。当日の参加者の約半数は今年の4月に臨床検査技師として働き始めたばかりの新入職員が占め、外部の研修会に初めて参加したという方もいたようである。

河野邊氏による講演「知っておこう！パニック値への対応」では、『臨床検査「パニック値」運用に関する提言書』に基づき、用語の定義や医師への報告手順の例が示された。クリティカルバリュー、通称パニック値の設定項目や設定値には統一された基準がなく、施設の状況に応じて個別に設定されるものであるという提言書の記載と、実際に研究班班員の所属する施設間でも設定項目と設定値に違いを認めた点は、自施設での日常業務だけでは得られない視点だった。医師への報告も同様に、施設ごとに定められたルールに則り行われるが、その際の注意点として、真のパニック値かどうかを評価することと、オーダ医に連絡がつかない場合の対応手順も定めておくことが挙げられた。特に前者に関連して、検体の性状や保存条件、採血手技により検査結果がどの程度変動するかという具体例の紹介があった。血清K（カリウム）値が5.5mmol/Lである患者の溶血検体を測定すると7.0mmol/Lの偽高値を示した、という例などは初心者にとって印象的だったのではないかと。

杉村氏によるインシデントについての講演では、インシデントとアクシデントの定義、再発防止のための分析方法およびインシデントレポートの意義について示されたのち、そもそもインシデントが発生する背景や、発生を予防するための組織的な取り組みについて説明があった。なかでもインシデントレポートについては、個人の問題として「これからは気を付ける」という結末にしないことが重要であり、組織としてその失敗を活用することに意義があるということが強調された。インシデントレポートは始末書ではないので積極的に書いてほしいという今回のテイクホームメッセージは、参加者の記憶に確と留まったのではないかと。また、杉村氏の講演のタイトル「知って防ごうインシデント事例集～先輩たちから学ぶ体験記～」にちなみ、実際のインシデント事例が5つ紹介された。それぞれの原因と対策も詳しく紹介されており、参加者が自施設でも発生しうるものについて予防策を練るきっかけとなったことを期待したい。  
(文責：関根梢恵)

## テーマ 知らなきゃ損!? part14 ～どうしてる？術中迅速細胞診の基本と実践～

主催 細胞検査研究班

実施日時：2025年6月4日 18時30分～20時00分

会場：浦和コミュニティセンター 第13集会室 教科・点数：専門教科－20点

講演 1：術中細胞診の基礎 ～当院の紹介をふまえて～

講師 1：並木 幸子（獨協医科大学埼玉医療センター 病理診断科）

講演 2：迅速細胞診の標本作成術 ちょっとした工夫で大きな差がつく！

講師 2：中山 美咲（防衛医科大学校病院）

講演 3：症例で学ぶ迅速細胞診のポイント

講師 3：永井 美悠（独立行政法人地域医療機能推進機構埼玉メディカルセンター 病理診断科）

参加人数：会員68名

出席した研究班班員：鶴岡慎悟 船津靖亮 急式政志 野本伊織 猪山和美 稲山拓司  
小川弘美 並木幸子 加藤智美

#### 研修内容の概要・感想など

本研修会は、術中迅速細胞診をテーマに開催された。術中迅速細胞診は、限られた時間内での迅速な判断が求められる場面で重要な役割を担っているが、その運用方法や標本作製の工夫

には施設ごとの違いがあり、情報共有の機会は限られている。そこで今回は、大学病院や基幹病院での実践をもとに、術中迅速細胞診の実際と工夫について、3名の講師に講演を依頼した。

講演1では、並木氏より術中迅速細胞診に関する基礎的事項について、体制の紹介を交えながら解説があった。癌取り扱い規約から診断の流れ、判断に必要なポイントなどが示され、特に若手検査技師にとって基礎知識の整理となる内容であった。

講演2では、中山氏より術中迅速細胞診における標本作製の工夫について紹介があった。時間的・環境的制約下での標本作製にはさまざまな工夫が必要であり、具体的な作業手順や注意点、トラブル時の対応などが示された。日常業務に直結する実践的な内容として、参加者の関心を集めた。

講演3では、永井氏より実際の症例をもとに、術中迅速細胞診での判断のポイントについて解説があった。術中という制約下における判断の難しさや、典型像を基にした鑑別困難例へのアプローチなど、細胞像に基づいた実践的な視点が示された。

本研修会を通じて、術中迅速細胞診における標本作製や診断の実際について、多様な施設の知見が共有された。特に、日常業務で生じやすい課題への具体的対応や、標本作製の精度向上に向けた工夫が示され、今後の実践に資する内容となった。術中迅速細胞診のさらなる質の向上と標準化に向けた議論の深化が期待される。

(文責：鶴岡慎悟)

## テーマ **実技研修会事前講習会** ～基礎を学び、正確な輸血検査を身につけよう～

主催 輸血検査研究班

実施日時：2025年6月6日 19時00分～20時30分

会 場：RaiBoC Hall市民会館おおみや 集会室8 教科・点数：専門教科ー20点

講演 1：日当直のための輸血の基礎

講師 1：佐々木 翔太（草加市立病院）

講演 2：異常反応について

講師 2：岸 健太（医療法人社団武蔵野会 TMGあさか医療センター）

参加人数：会員32名

出席した研究班班員：宮澤翔子 岩崎篤史 岸健太 廣田渉 佐々木翔太 大垣秀友 渡邊寧々

研修内容の概要・感想など

今回は7月13日に予定している輸血実技研修会の事前講習会で「基礎を学び、正確な輸血検査を身につけよう」をテーマとして研修会を行った。安全な輸血を行うためには、正しい検査手技を身につけることや異常反応を正しく解釈することがとても重要である。

佐々木氏の講演では、試薬・試験管の準備における注意点や赤血球浮遊液の調製方法、凝集反応の見方といった検査の基本操作から結果の判定まで、一連の流れについて詳しい説明があった。試験管には患者氏名を明記し、結果記入用紙と並びを同じにすることや試薬と検体の分注状態を次のステップに移る前に必ず確認するといった検査ミスが減らすためのポイントを学ぶことができた。受講者にとっては自分自身の検査手技を振り返るきっかけになったと思われる。

岸氏の講演では、輸血検査の異常反応とはどのようなものか説明があり、さらに多くの症例を提示してそれぞれどのように考えていくか丁寧な解説があった。異常反応の中には亜型や不規則抗体といった検体に由来する反応の他にも、試薬の入れ忘れなど検査者の手技のミスに起因する反応も存在する。異常反応に遭遇した際は、自身の検査手技に間違いがなかったか確認することも重要であると感じた。

今回の講演の内容を日々の業務に活かすことで、各個人の力量の向上につながると考える。7月に開催する実技研修会においても、参加者がよりスキルアップできるよう取り組んでいきたい。

(文責：廣田渉)

**令和7年度  
公益社団法人埼玉県臨床検査技師会  
第3回 理事会議事録**

日時：令和7年6月5日(木) 19時00分より

場所：埼臨技事務所

さいたま市浦和区領家7-14-7

議題：Ⅰ. 行動報告 Ⅱ. 報告事項  
Ⅲ. 承認事項 Ⅳ. 議題

出席：(理事)松岡 猪浦 山口 濱本 阿部  
西田 三木 佐瀬 網野 藤原 塚原  
神嶋 笛木 長谷川 神戸 小林  
工藤 久保田 長岡 土田  
(監事)遠藤 細谷

Zoomにて出席

(理事)原

欠席：(理事)伊藤

本日の理事会の出席者は23名であった。理事の出席者は21名で、現在22名の過半数に達しており、定款第33条第1項の決議を行うに必要な要件を満たしていることを確認した。

議長は、定款第32条第1項より、松岡優会長が務めることとなった。

## Ⅰ. 行動報告

(令和7年5月8日～令和7年6月4日)

5月8日(木)令和7年度第2回理事会：

松岡、猪浦、山口、濱本、阿部、西田、三木、佐瀬、網野、伊藤、藤原、塚原、神嶋、笛木、長谷川、神戸、小林、工藤、長岡、久保田、原、土田、遠藤

5月13日(火)川越市保健所衛生検査所立入検査：松岡

5月20日(火)第53回埼玉県医学検査学会実行委員会：伊藤、藤原

5月28日(水)関甲信・首都圏支部幹事会：猪浦

5月28日(水)全国「検査と健康展」企画打ち合わせ：塚原

5月28日(水)一都八県会幹事会：猪浦

5月29日(木)令和7年度第1回臨床検査精度管理専門委員連絡会議(埼玉県)：松岡

5月29日(木)第25回わらび健康まつり第1回実行委員会：塚原、神嶋

6月2日(月)青年部委員会：濱本、神戸、塚原

6月2日(月)レイボックホール小ホール抽選会：三木

## Ⅱ. 報告事項

### 1 事務局

- 1) 埼臨技事務所の夏期休暇について今年度より、事務員が交代で休暇をとるため夏期休暇を設置せず運用する。

- 2) 5月8日(木)第23回乳がん市民フォーラムin越谷の後援承諾の回答をした。

- 3) 5月22日(木)埼玉県糖尿病相談員CDEL第8期生認定講習会の後援承諾の回答をした。

### 2 総務部

- 1) 5月15日(木)さいたま市公共施設予約システム利用者登録を行った。

- 2) 6月8日(日)タスクシフト指定講習会(埼玉県 035)を開催予定。  
：猪浦、濱本、小林、藤原、土田、原、佐瀬(責任者)

- 3) 6月16日(月)だより第553号発行予定。

### 3 事業部

- 1) 5月2日(金)検査室管理運営委員会会議を開催した。(別紙資料1)

- 2) 5月28日(水)全国「検査と健康展」の企画として埼玉県県民生活部青少年課とリアル体験教室の打ち合わせを行った。(別紙資料2-1, -2)

- 3) 9月25日(木)19:00～20:30 検査室管理運営委員会研修会を予定している。

臨床検査技師の可能性を検査室の外に示す！ ～2040年問題を見据えて～

講演：臨床検査室外での役割と高齢化による医療課題への対応

講師1：梶 優展

(アボットジャパン合同会社)

講師2：大喜田 法子

(アボットジャパン合同会社)

### 4 学術部

- 1) 6月4日(水)8・9月生涯教育研修プログラムを埼臨技ホームページに掲載した。

### 5 精度保証部 特になし

### 6 会計部

- 1) 令和7年度正会員費79名395,000円、入金金49名49,000円、合計444,000円の入金があった。

- 2) 日臨技に2025年度都道府県向け臨床検査精度管理調査用資料代ならびに梱包包材および運送費用として827,503円を支払った。

- 3) 石井印刷へ、埼臨技だより第552号Web版8P 41,800円を支払った。

### 7 精度管理委員会

- 1) 令和7年度埼玉県医師会臨床検査精度管理調査会議を6月19日(木)Webにて開催予定である。

### 8 一都八県会長会議

- 1) 5月28日(水)一都八県会幹事会(Web)が開催された。

### 9 日臨技関甲信支部 特になし

### 10 日臨技

- 1) 6月28日(土)日臨技総会がステーションコンファレンス川崎にて開催予定。

### 11 第53回埼玉県医学検査学会

- 1) 5月20日(火)第7回実行委員会が開催された。(別紙資料3)

- 2) 一般演題の抄録審査の手順について確認があった。学会側は、演題登録された抄録について内容を精査後、抄録審査用データを久保田学術部長に提出とする。

(別紙資料4)

### Ⅲ. 承認事項

#### 1 事務局

- 1) 会員動向(令和7年度分)

令和7年6月1日現在  
会員数 3,694名 [令和6年度会員数3,612名]  
(新入会員165名)

賛助会員 63社 [令和6年度72社]

承認された。

#### 2 総務部 特になし

#### 3 事業部

- 1) 臨床検査技師養成校連絡協議会委員の退任と追加について

退任：大久保 滋夫 氏

(文京学院大学 保健医療技術学部  
臨床検査学科)

退任日：令和7年5月31日

追加：高橋 涼 氏 (同校)

退任：尾形 隆夫 氏

(西武学園医学技術専門学校)

退任日：令和7年5月31日

追加：高橋 尚久 氏 (同校)

上記の件について、塚原晃事業部長より発言があり、審議の結果、承認された。

#### 4 学術部 特になし

#### 5 精度保証部 特になし

#### 6 会計部 特になし

#### 7 精度管理委員会 特になし

### 8 第53回埼玉県医学検査学会

- 1) 実行委員メンバーと研究班員がいる施設職員を対象としたアンケート調査実施について

スクールカウンセラーの先生より、現在の実行委員のみの結果では年齢に偏りがあること、またアンケート結果を基に講演内容を考えたいとの意見があるため協力をお願いしたい。

- 2) 吹奏楽公演について (別紙資料5)

市民公開公演として吹奏楽演奏を県内高校の吹奏楽部に依頼したい。

上記の件について、藤原美香学会担当理事より発言があり、審議の結果、1)について承認された。2)の吹奏楽演奏については、市民公開講演後に吹奏楽演奏とすること、参加される県民の誘導方法などに課題があるため、松岡学会長が学会長へ詳細を確認し課題が解決された場合に承認することとした。

### 9 関甲信支部・首都圏支部医学検査学会

特になし

### Ⅳ. 議題

#### 1 事務局 特になし

#### 2 総務部 特になし

#### 3 事業部 特になし

#### 4 学術部 特になし

#### 5 精度保証部 特になし

#### 6 会計部 特になし

以上で本日の議事を終了し、議長は協力を謝して閉会とした。

## あ と が き

雨降りの寒い日と晴れた暑い日が交互にやってくる日々が続いて「やれやれ」な気持ちですが(掲載時は酷暑日の連続?)、会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか?

さて、日常では手書きするのも、速く書いて崩れた字のメモぐらいなのですが、今回の原稿は一度、手書してからPCに打ち込みました。少しゆっくりした速度で書くことで「書く」自体を少し楽しいと思えました。

私はもともと癖字で、ペンの持ち方も悪い自覚はありました。そのせいか「書く」は疲れるものと思い続けていました。そんな中で最近、正しいペンの持ち方に興味がわいて少しずつですが試しています。ペンを正しく持てて書いたときは、慣れずに崩れた字になりますが、楽に書ける実感があります。時間に追われて書くと途端に後戻りしてしまいますが、読みやすい字を楽に(疲れずに)書こうとあがいています・・・もしかしたらいつか書道なんていう趣味に発展しちゃうかも!?!・・大げさな!(笑)

(長谷川 記)

